

2014年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（長期）
所属・職・氏名：文学部・教授・水野尚
研究課題：1850年のジェラルド・ド・ネルヴァルの文学活動
留学期間：2014年3月19日～2015年3月19日
留学先：フランス・パリ
パリ第4大学・ソルボンヌ

研究成果概要

1850年はジェラルド・ド・ネルヴァルの文学活動の中でも最も重要な年であると見なされている。その年の前半には『東方紀行』の最終章となる「ラマザンの夜」を共和主義的な主張を持つ『ナシオナル』紙に掲載。後半は、1855年の死に至るまでに次々と出版される傑作群『火の娘たち』や『オーレリア』などの礎石となる『塩密売人』を同じ『ナシオナル』紙に発表する。さらに、レチフ・ド・ラ・ブルトンの伝記を執筆する過程で、「私」を主語にした一人称の文体についての考察を深めた。また同時期に、ネルヴァルに関する伝記的記述として重要な意味を持つイポリット・バブーによるネルヴァル伝が公表されると同時に、若い時に出版した『ファウスト』の翻訳がゲーテ自身から高い評価を受けていたことがフランスで始めて公やけにされた。こうして、ネルヴァル自身が自己について語る下地が醸成されていった。それにもかかわらず、これまでのネルヴァル研究の中で、1850年に執筆された作品自体を分析の中心とする研究がそれほど多く行われてきたとはいえない。そのために、今回の一年間の研究期間を利用して、以上の作品を研究課題とした。もちろん、1850年の文学活動を中心に研究するとはいえ、ネルヴァルの作品世界全体を見渡すことは不可欠であるし、また、詩的な散文を理解する上では、ネルヴァル以外の詩の研究も視野に入れた。

最初に取りかかったのは、「ラマザンの夜」の資料収集である。イスタンブールの紀行文であるこの作品の中心には、フリーメーソンにおけるイニシエーションの物語を原型とするアドニラムとシバの女王を主人公にした伝説が置かれている。これまでの研究で様々な出典の指摘はなされているが、ソロモンを完全に嘲笑する展開はアラブの伝説の中でも未だに発見されていない。そこで、フランス国立図書館において集中的な資料調査を行った。また、ネルヴァルが明らかに参照したデルブロ著『オリエント事典』の中でも、誰もが参照する初版でなく、あえて第2版を購入し、これまでに指摘されていない事項の発見に務めた。また、ソロモンのシバの女王に対する恋心が揶揄の対象となっていることから、『雅歌』に関する文献の収集、調査も行った。これは、100年を越えるネルヴァル研究の中でもまだ発見されていない出典を見出す作業であり、まだ結論に達することはできていないが、今後の調査で必ず実を結ぶ基礎となると確信している。また、「ラマザンの夜」を対象とした修士論文がソルボンヌ大学のオリヴィエ・ミエ教授の指導の下で提出されたため、2014年5月22日、ソルボンヌ大学内で行われた修士論文口頭試問において主査を務めた。

2014年6月5日から7日の間に開催された「ネルヴァル、歴史と政治」と題されたシンポジウム（フランス古文書館において開催）では、主催者の一人として参加。ネルヴァルの政治と詩の関係を明確な形で明らかにし、その分野の研究の基礎となる「栄光の3日間の直後

に「ネルヴァルにおける政治と詩」と題した口頭発表を行った。これは、1848年の2月革命後のネルヴァルの文学活動が政治的な言説を多く含んでいるにもかかわらず、これまでのネルヴァル研究では、とりわけ詩の分野でネルヴァルは非政治的と考えられることに対する反証として構想したものである。

その後、ネルヴァルの散文の美を研究するために、ボードレールの散文詩との比較研究を行った。それは、これまでの文学ジャンルを横断する雑誌記事的な「塩密売人」が、実は詩に関する考察でもあり、しかも時として詩的な散文で記されているところから、その美を分析するために行った研究である。ネルヴァルの詩的活動としては韻文詩のみが取り上げることが多かったが、しかし散文による詩的表現を1850年以降強く意識し、しかもそれが一人称の文体の使用・深化と同時に行われたことを明らかにすることがこの論文の目的であった。

さらに、一人称の文体の研究を続け、「塩密売人」から『幻視者たち』『ローレライ』『火の娘たち』それぞれの作品の序文、そして『シルヴィ』を通して『オーレリア』に至る一人称の散文の全体像を明らかにした。その成果は、まず2014年12月13日にソルボンヌ大学において発表した講演、「「オーレリア」あるいは人間の魂の研究—ネルヴァルの後期作品における伝記的記述から自伝的記述へ—」としてまとめた。その後、「オーレリア」が2015年度の高等師範学校の試験課題の一つであることから、2015年1月22日にはグルノーブルのシャンポリオン高校・高等師範準備クラスで、2月12日にはストラスブールのフュステル・ド・克蘭ジュ高校・高等師範準備クラスで同様の講演を行った。その際の生徒からの質問等に関しては、その場で答えるとともに、複雑な問題に関しては文書にて改めて回答を行った。

その他に、ネルヴァルの韻文詩に関する研究も継続し、ほぼ全ての韻文詩を視野におさめた分析を行い、『ネルヴァルの韻文—オドレットとソネット』として400枚程度の研究書にまとめることができた。この原稿に関しては、目次・索引等を付し、最終チェックを行った上で、フランスで出版社と交渉する状態にある。韻文詩に関するこの研究も、1850年の「塩密売人」の中でネルヴァルが展開した詩論を含んでいる。

詩的表現についての研究はネルヴァルだけに留めることなく、19世紀後半の詩を代表するランボーについても行き、『ランボー—韻文と散文の間—「見人の手紙」から「言葉の錬金術」へ』を2014年10月にキメ書店より上梓した。さらに、日本人のフランス文学者としての特性を活かし、同年10月18日、ランボー友の会において、「日本文学を鏡として見るランボー」と題する講演を行い、ランボーから影響を受けた小林秀雄と中原中也、及び短詩として捉えた俳句から読み説くランボーについての考察を、フランス人の文学愛好家たちに伝えた。この講演内容は、2015年に出版される『生きたランボー』に掲載予定である。

また、日本でフランス大使を務めたポール・クローデルの博士論文がドミニク・ジェラーズ・ミエ教授の指導の下でソルボンヌ大学文学部に提出され、私が19世紀文学の専門家であり、また日本人研究者であるところから、2015年1月10日ソルボンヌ大学において行われた口頭試問会の審査員を委嘱された。その内容に関しては審査委員長に報告書として提出した。

以上が、一年間の研究成果の概要であるが、私の研究生生活にとり非常に稔り多いものであり、また今後の教育活動をより豊かにするものになったと考えている。